

2019年を占う 3つのポイント



立命館アジア太平洋大学 (APU) [学長]
学校法人立命館 [副総長・理事]

出口 治明

Haruaki Deguchi



2019年の世界をどうみるか。トランプ大統領の振る舞いやブレグジットを例にあげ、グローバリゼーションは曲がり角にきている、新しいパラダイムが始まろうとしているという根強い見方がある。これに対して、歴史は振り子のようなものでジグザグに進むのが常であり、グローバリゼーションという大きい流れは損なわれていない、たとえばSDGsやCOP21、あるいはTPPをみよ、という意見もある。どちらが正しいかは、歴史の審判を待つしかないのだろう。

ただし、アメリカのように自国ファーストが貫ける国は実はそれほど多くはない。現代の文明は、化石燃料、鉄鉱石、ゴムという産業革命の3資源の上に築かれているが、これらの資源は偏在しており日本のようにもたざる国が大半だ。3資源のどれかを豊富にもっている国は自国ファーストを追求することができる。なぜなら、バーター取引ができるからだ。しかし、何ももたない国は、国際協調に努めグローバリゼーションを進めるよりほかに手立てがない。この点はしっかり押さえておくべきだろう。

2019年の世界を占ううえで大切なポイントがいくつかある。

第一は成長率だ。IMFの世界経済見通し(WEO)によると、2019年は3.9%成長から3.7%成長へと下方修正がなされた。この四半世紀の平均は3.5%程度なので、まだ高水準ではあるものの、米中貿易摩擦などのリスク要因も多く、さらに弱含む恐れがある。成長率が鈍化すれば、一般論として、格差の是正が難しくなり社会は不安定に向かう。トランプ旋風にもかかわらず

2018年の世界がそこそこに回ったのは、世界経済が3.7%成長を成し遂げたからだ。

第二の注目点は、アメリカの民主党の大統領候補が誰になるかだ。アメリカは世界一の経済大国でありかつ世界最強の軍事力をもつ覇権国家だ。内政は、三権分立制度が確立されており、合衆国であって各州の権限も強く、大統領が誰であってもそれなりに歯止めが効くが、外交や軍事は大統領の専権が働く。トランプ大統領といふかなり特異なリーダーが後何年世界を掻き回すのか、それは、民主党の大統領候補選びとも大きくかかわってくる。

第三は、米中貿易摩擦の行方だ。世界の2大経済大国が貿易戦争を続けていて世界経済が安泰なわけがない。アメリカの狙いはトランプ大統領の単純な赤字解消論だけではなく、底流に中国の勃興に対する警戒論があるので、そう簡単に振り上げた拳を下ろしはしないだろう。

これに対して中国は今のところ冷静な対応を行っているように見える。アメリカの攻撃に必要な反論を行っているだけで、中国のほうからは何も仕掛けてはいないからだ。時間が経てば中国の経済力は確実に増大していくので、アメリカをいかにいなすのか、最小のコストでいかに時間を稼ぐのかを熟慮しているのだろう。とはいえ、どの時点で一応の手打ちがなされるのか、それによって2019年の姿は大きく変わってくるだろう。もちろん、いったんは収まっても、米中の覇権争いがこの後何次にもわたって繰り広げられることはほぼ確実な情勢なので油断は禁物だが。